

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究」（2022 年度第 2 回・通算第 5 回研究会）

2023 年度第 2 回研究会（通算第 5 回目）／第 30 回東京移民言語フォーラム

日時：2023 年 1 月 7 日（土）13:00–15:30

場所：Zoom によるオンライン開催

主催：AA 研基幹研究「アジア・アフリカの言語動態の記述と記録：アジア・アフリカに生きる人々の言語・文化への深い理解を目指して」（DDDLing）

協賛：東京移民言語フォーラム

報告者：安達真弓（AA 研）

会の始めに、代表者である安達から「共にドイツ語の変種として捉えることのできるかもしれない、ドイツで使用される第二言語としてのドイツ語と、フランス・アルザス地方で使用されるゲルマン系のアルザス語についての情報共有を行う」という第 5 回研究会の位置づけについての説明があった。その後、2 件の研究報告と討論が行われた。以下に各報告の要旨と、討論の内容をまとめる。

1. 平高史也（AA 研共同研究員，愛知大学特任教授，慶應義塾大学名誉教授）

「第 2 言語としてのドイツ語：習得、教育、政策—ある研究書の紹介を通して—」

副題の「ある研究書」とは Bernt Ahrenholz & Martina Rost-Roth (Hrsg.) (2021) *Ein Blick zurück nach vorn. Frühe deutsche Forschung zu Zweitspracherwerb, Migration, Mehrsprachigkeit und zweitsprachbezogener Sprachdidaktik sowie ihre Bedeutung heute*. Berlin, Boston: Walter de Gruyter (『ふりかえり、前へ。ドイツにおける初期の第 2 言語習得、移住、多言語主義、第 2 言語教育の研究と今日的意味』) で、1970 年代からの第 2 言語としてのドイツ語教育研究関係者のインタビューや講演録等を収めている。編者の 2 名が 2012 年の東京移民言語フォーラム (TAFIL) の国際シンポジウムの出席者でもあるので、同書の紹介を兼ねて、旧西ドイツにおける第 2 言語としてのドイツ語 (移民のドイツ語) の研究では、HPD (ハイデルベルクのピジンドイツ語) や ESF (ヨーロッパ科学財団) の共同研究などのプロジェクトに触れ、教育では省庁や民間団体が加盟していた社団法人外国人就労者のためのドイツ語連盟 (Sprachverband Deutsch für ausländische Arbeitnehmer e.V.) の実践や理念が、現在の統合コースの基礎になっていること、今世紀からは PISA 調査の結果等の理由で社会の関心が子供の教育にも向けられていることなどに言及した。質疑応答では、第 2 言語と外国語の概念の違

い、自然習得と教室学習の発達段階の異同、統合コースの現状、読み書きの指導等について意見交換が行われた。

2. 杉浦黎 (AA 研共同研究員, 東京大学大学院)

「アルザスにおける地域語使用とその継承」

フランス北東部に位置するアルザスは、古くからドイツとフランスの国境の変動に伴って、ドイツとフランスの間を複数回行き来してきた境界地域である。本発表では、フランス語による影響を受けたゲルマン系の地域語・アルザス語に着目をし、使用と継承のあり方を明らかにした。アルザス語は街路名の二言語表記や伝統料理名には使用されるが、公教育では使用されておらず、継承は家庭内で主に行われていることが示された。

質疑応答では地域語と標準ドイツ語の関係をどのように捉えるのかについて、言語政策や言語教育などの観点からの質問も挙げた。言語政策の中で定義づけられる地域語とアルザスの人々が連想する地域語や方言は必ずしも同一ではない点が議論され、言語を明確な実体として捉えることの困難さが浮かび上がった。

研究会には 40 名 (うち代表者・所員・共同研究員 14 名) の参加があり、盛況のうちに行われた。

以上
(文責・安達真弓)